
できそこないハンター

ミナクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

できそこないハンター

【コード】

N9019F

【作者名】

ミナクア

【あらすじ】

できそこないハンターの話。とりあえずがんばって戦ってみるんですが……

「マジで大丈夫だろうか？」 「大丈夫だって」 「ここは雪山。」

俺は超初心者のハンター。

ベテランのハンターに連れられてティガレックスを退治しに来た。

「とりあえずホットドリンク飲んどけよ」とベテランが言う。

「わかった」俺はそう言ってドリンクを取り出す。しかし体は一向に温まらない。

「ベテランよ。」

「何だ」

「俺、間違えてクーラードリンク持って来ちゃったよ。しかもぐびぐび飲んじやったよ」

「・・・」

「このありさまなんだけど、マジで大丈夫かな」

「ま、やってみよう。最悪報酬が無くなるだけだしさ。とりあえず後についてきて。」

多分広いところにいるから。もし怖かったら戦わなくても大丈夫。剥ぎ取りだけ

やったらいいよ」

「剥ぎ取りは結構得意だな」

「誰でも得意だろ！ほら、ホットドリンク。やるからこれ飲んどけ」

「あざーっす。ぐびぐび。うんめえー！」

「あつたまつた？」

「あつたまつた」

「んじゃ行きますか」

そのエリアにはティガレックスが一頭いた。

まだこちらに気づいていない。ベテランは見てるだけでいいと言ったが

せめて一太刀くらいは浴びせたい。俺はティガに向かって思い切り走った。

結構距離はあるが大丈夫だろう

「おいっ。何やってるんだ！？」とベテランが叫ぶ

「見りゃわかるだろ。とりあえず一太刀くらいあびせるのなら俺だ

って出来る！」

「あぶないぞ！」

「大丈夫大丈夫。気づかれてないから！」

「戻るんだ！」

その声を無視する。先手必勝だぜ！

俺が近くにたどり着いたとき、ティガはこちらに気づく。だがもう片手剣を抜いて

いる。おらっ、くらえっ！

だが、残念。ティガの耳をつんざくような咆哮に思わず耳を覆ってしまう。

一太刀を浴びせることはできなかった

ベテランが叫ぶ

「危ないっ、離れてっ！」

もちろんさ。俺の危険を察知するレーダーはさっきからびんびんに反応して真っ赤だ。

俺はティガに近づくとときと同じくらいの速さでティガから離れるべく走る！

でも、足がだんだんついてこなくなる。

「ベテランっ、足がついてこねーよ！」我ながら情けない声だ。

「そりゃスタミナ切れだっ！」ベテランはティガの横に回りこみつつ叫ぶ。

ふらふらと歩きながら逃げる俺の背後からティガの体当たりが！

思わず吹っ飛ぶ！

すげえ、俺ってこんなに高く飛べるんだ・・・アメリカの空気を吸ったら

もつと高く飛べるって思ったのかなぁ・・・なんていうセリフが思い浮かんだら

死亡フラグだろう。そして俺はそのセリフが思い浮かんでしまった・・・。

幸い新雪だったので地面はやわらかい。叩きつけられずに済んだが体力の減り方は

相当なものだ。そりゃろくな装備をもっていないから当然といえば当然だ。

「とりあえず俺がひきつける！その間に回復しといてくれ！」

ベテランが叫ぶ！

「任せてくれ！」

俺は体力を回復するべく片手剣に手を伸ばす。そして切れ味を良くするために

剣を研ぐ・・・ってあれ？

「なにやってんの！？」ベテランがティガを牽制しながらも聞いてくる。

「テンパって間違えて砥石使ってたわ」

「テンパリすぎだよ！」

「すまん！」

「落ち着いて回復薬を探すんだ！」

「わかった！」俺は回復をする。

それからティガをみるとベテランと戦っているために俺に背後を見させている

「チャンス！俺も加勢するぜ！」

「ストップ！そのタイミングはティガが大暴れするところだ！」

再び俺は宙を舞い地面に叩きつけられる。

その後ベテランのアドバイスでエリアを移動。カンカンと氷の割れ

目にピッケルを打ち込み

蜂蜜を探したりした。その間にベテランはティガを倒してくれた。

「倒したから戻ってきてても大丈夫だ」とベテランの声がある

俺は戻り、剥ぎ取りをする。

「・・・俺はハンター、向いていないみたいだ」剥ぎ取りをしながらベテランに言った。

「そうか」とベテランは悲しげに言う。

その後いろいろあって俺は村の訓練所の訓練官の手伝いをする仕事に就いた。

そこにはいろんなハンターがやってきては訓練をする。

そして巣立ち、一回り大きくなって戻ってくる。

俺はそんな彼らの武勇伝を聞きながら酒を飲むのが好きだ。

わくわくしてくる。彼らがみる景色は俺がどんなにがんばっても見ることが出来ないものだ。

君も訓練所に来たときは気軽に声をかけてほしい。

そして冒険の話をたくさん聞かせてくれ。

それがハンターになり損ねた俺にとって最高の楽しみなのだから。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9019f/>

できそこないハンター

2010年12月12日23時41分発行